

確かな読みの力を育成する～国語科の基礎・基本の定着をめざして～

大阪市立東小路小学校 研究部

1 研究の内容

研究を進めていくにあたり、前年度に引き続き、以下の柱を立てて実践した。

- ① 音読や漢字など、基礎・基本の力をつけるための指導法を工夫する。
「音読指導の工夫」「漢字学習の工夫」「語彙を増やす工夫」
- ② 読み取る力を深めるための指導法を工夫する。
「発問の工夫」「板書やワークシートの工夫」「学習形態や方法の工夫」
「掲示物の工夫」
- ③ 日本語に親しむ活動の場を工夫する。
「読書指導の工夫」「日本語を楽しむ活動の工夫」「日本語検定の活用」

2 成果と今後の課題

(1) 成果

- ① 音読指導では、授業の初めに「詩」や「古文」の音読を行うことは、声を出すことで授業に入る切り替えにもなり、学習への集中力アップにつながったと考えられる。

漢字指導では、本年度より全校をあげて行った「漢字タイム・さかのぼり指導」により、漢字書字力アップへとつながった。これは「漢字書字力テスト」の11月の結果にも表れている。また、当該学年の漢字学習でも、「そら書き」など書き順指導とともに、一画一画でいねいを書くことを繰り返し指導し、学級でも漢字テストなどで習得度を確かめている。

語彙をふやす指導では、3年生以上の学級には一人1冊辞書を整備した。手元におき、分からない言葉は自分で調べる活動も行ってきた。百人一首をすることで古文にふれる機会も多くなったので、国語辞典で調べにくいものは、授業で指導者が知らせるなど、さまざまな語彙を身につけさせることができた。

- ② 発問の工夫では、分かりやすく適切な発問をするため、発問の言葉を厳選するように努めた。児童が取り組む学習内容が分かるように指示の言葉をよく考えた。その結果、児童はとまどうことなく、発問の意味を理解し、すすんでワークシートに記入することができた。

板書の工夫では、児童が学習の流れをとらえやすいようにした。登場人物の気持ちは下段にまとめて板書し、登場人物によってチョークの色を変えた。また、気持ちの変化をとらえやすくするため、「気持ちマーク」の形や大きさを変えて表すようにし、一目で分かるようにした。

学習形態や方法の工夫では、「一人」「ペア」「グループ」「全体」などと活動場面を考えて、それに応じた指導を行ってきた。登場人物の気持ちについてまず一人で考え、その後グループで交流し、それを全体で共有するという展開で授業を行った。児童は、自分の考えを友だちに話すことで、自分の意見に自信をもち、多くの児童が全体場ですんで発表をすることにつながった。

掲示物の工夫では、前時までの学習内容をまとめたものを教室の横側に掲示して、本時の学習内容を考える際の手助けとなっていた。また、「ハンドサイン」「声のものさし」「音読のしかた」などを教室に常時掲示してきた。普段の授業でも活用し、発達段階に応じた活用をすすめていくようにした。

- ③ 読書指導では、朝の10分間読書と学期に1回、2週間の読書週間を設定した。また、読書カードを活用して読んだ本の合計ページを書いたり、教室に掲示した「読書の木」に読んだ本の数だけシールをはったりすることで、児童の読書への意欲を高めることもすすめてきた。

日本語を楽しむ活動の工夫では、高学年で「五色百人一首」を行った。試合自体を楽しむ以外にも、教科書に出てくる古文や短歌・俳句などに興味をもつ児童が増え、歴史に興味をもつなど、他の学習にもつながっていった。また、「ことばあそび」や「予想して読む詩・絵本」では、文章の使い方やさまざまな言葉を知ることによって知識を増やすことができた。

日本語検定・団体特別試験では、日本語の総括的な力を判定することができるため、結果が返却されるときを楽しみに待つ児童も多かった。さらに、上級をめざしたいという思いをもって自分で学習していくことは、これからの一人学習の手立てとして役立つと思われる。

(2) 課題

- ① 基礎・基本の力をさらに充実させるために、全校で音読指導や漢字指導の統一した取り組みを確立していく。
- ② 読み取ったことを表現できる活動をめざして、さらなる指導の工夫が必要である。単元の第3次「表し・生かす」では、その中で第2次までに学習したことをどんな手立てで、どのように生かすのかを、学年等で話し合いをすすめながら実践していく必要がある。
- ③ 「朝の10分間読書」「五色百人一首」「日本語検定」など来年度以降も継続して取り組んでいく。さらに、児童が意欲を持って取り組む活動を行うために研修を深め、日本語に親しむ活動ができる教材の探究をめざしていく必要がある。